

地域とともに 未来をつくる 高校事例

地域に根ざした仕事や活動がしたい。地域のつくり手になりたい。
本企画では、そんな生徒の思いを引き出す教育活動に取り組み、
地域とともに未来をつくることに挑戦している学校を紹介します。

CASE 1



八重山商工高校
(沖縄・県立)

CASE 2



都城商業高校
(宮崎・県立)

八重山商工高校 (沖縄・県立)

学校
DATA

1966年創立／機械電気科(機械コース・電気コース)、情報技術科、商業科(会計システムコース・情報ビジネスコース・観光コース)／進路状況(2026年3月卒業)大学24人、短大1人、専門学校42人、就職56人、そのほか(台湾留学)1人／Instagram「八重山商工高校」(@yaeyamasyoko)

自分たちの島は、自分たちで変えていく。 地域を知り地域を愛す、つくり手を育てる



写真後方左から、商業科観光コース長の儀間政樹先生、進路指導部主任の崎山錦士郎先生。写真前方左から、商業科観光コース3年の上原えりさん、宮良美都子さん、東長田千尋さん。

地域を知り関わることが、 将来、行動を起こす原動力に

沖縄県の西端、八重山地方の中心地である石垣島にある八重山商工高校は、商業系3コース、工業系3コースを有する専門高校。教育方針の一つに「貢献」を掲げ、地域連携・地域貢献を通して自己の社会的な役割やあり方を深める教育を行ってきた。自身も石垣島出身の進路指導部主任・崎山錦士郎先生は、地域や学校が抱える課題や生徒の様子について次のように話す。

「八重山地域においても、少子化に伴う地域

の担い手不足は課題になっており、我々も危機感をもっています。特に、地元出身の人間が積極的に参画し、地域を支え盛り上げることが大事であり、同時に現状の課題でもあると感じています。一方、生徒たちは概して地元愛が強く、進学・就職で一度島を離れても、いずれは戻ってきたいと考えている子が多いです。地域で何をしたいのか、地域をどうしていきたいのか、地域にどう貢献できるかといったことを高校時代に深めることで、将来、島に戻ってきたときにアクションを起こす原動力につなげてほしいと考えています」

その素地をつくるためには、まずは地域のことをよく知らないといけない。そうした考えから、同校では地域に根ざした学校設定科目を多く設けている。例えば、「沖縄の歴史」「郷土の自然」「郷土の芸能」「郷土の音楽」「郷土の舞踊」などがあり、選択する生徒も多い。また、郷土芸能部も多くの部員を抱え、島の行事など地域で活躍する場面も多い。

6つのコースのなかでも特に八重山の自然・文化・芸能を学ぶことに注力しているのが、商業科の観光コースだ。先述の科目に加えて「ネイチャーツーリズム」が必修科目となっており、

3年間を通して英語に加えて中国語を学ぶ。

「八重山地域にとって観光業はとても重要な産業であり、観光を専門的に学んだ担い手の育成は不可欠です。距離的に近い台湾との交流もあり、中国語を身につけることはアドバンテージになるだろうと、中国語教育については30年以上前から取り組んできました。中国語の発表会やスピーチコンテストの全国大会で上位に入賞する生徒（後出の上原さん、東長田さんも受賞）や、卒業後に中国や台湾の大学に進学する生徒も出ています」（崎山先生）

深く知ること、地元愛を 課題解決力に進化させる

観光コースでは、「八重山の伝統文化を観光資源に」をテーマに、昨年度から探究的な

学びに力を入れ始めた。コース長を務める儀間政樹先生は、沖縄本島の出身者。同校に赴任した際、地元・八重山に誇りをもつ生徒が多いことに感銘を受ける一方で、課題も感じたと言う。

「地元への誇りや愛情は強いのですが、八重山の自然や伝統文化・芸能などについて深く知らない生徒が多い印象でした。せっかく思いがあるのだから、地元のことを語れるようになってほしい、地域のために行動ができるようになってほしい。卒業後すぐにではなくても、八重山で生まれ育った子どもたちが八重山の課題を解決できるようになってほしい。そんな思いから、生徒に探究的な学びの場を提供したいと考えました」（儀間先生）

「机上での学びだけではなく、実際にフィール



【右上】台湾の学校との交流の場で、伝統舞踊を披露する観光コースの生徒たち。【左】マーケティング部ではスマムニ（島言葉）の観光資源化に取り組む。自作のアニメーション（右下）を観光客に視聴してもらい、アンケートを実施。観光に活かす施策を検討している。

ドに出て、いろいろな人と出会い、話を聞いて、島の現状を肌で知ることがまずは大事」と崎山先生。今年度は、石垣市や建設会社と協働して行ったビーチクリーン活動やゴミ処理場の見学、旅行事業者と連携してのバスガイド実習、「スマムニ（島言葉）」の調査・発信、川平湾やバナナ公園などでのフィールドワークなど、授業や課外での体験を通して島の魅力や現状を知る機会を多く設けている。

例えば、バスガイド実習では、県外からの修学旅行生のバスツアーに観光コースの生徒らが2人1組で同乗し、ガイドを務める。道中では三線や手話も披露する予定だ。訪れる場所はあらかじめ決まっており、生徒はそのスポットについて調べ、話す内容を自分たちで考える。現在、原稿を作成中だという観光コース3年の宮良美都子さんは、「ガイドをするために調べるなかで、石垣のことを知っているようで知らなかったんだと気づかされた。自分たちにとっても勉強になっている」と言う。また、同・上原えりさんも、「地元にこんな素敵なおところがあったんだとわかり、石垣の魅力を観光客の方々にももっと知ってほしいと思った」と続ける。

同・東長田千尋さんは、漂着ゴミを拾うビーチクリーン活動や自然の中でのフィールドワークを通して、「石垣の豊かな自然を残していきたいと強く思った」と言う。そして、ビーチクリーン活動を個人で続けている人の話を聞き、「自分に何ができるかはまだわからないけど、まずはボランティアに参加したい」と今の気持ちを語る。



【上】ビーチクリーン活動の様子。同日午後には、漂着プラゴミを使ったアップサイクル商品のアイデア出しを行った。【下】理科や社会の授業では、八重山の自然や地理を知るためのフィールドワークを実施。

豊かな自然や文化を残し、 島の人が活躍するまちに

「地域側にも高校や生徒との連携に対して高いニーズがある」と儀間先生。石垣島は、各種スポーツの合宿や学校の研修旅行等での来訪者も多く、そうした団体との交流会・発表

会やまち案内の機会が舞い込むのは日常茶飯事だ。「学校の教育目標や方針と合致する限り、声がかかればできるだけ受けるようにしている。その結果、観光コースの生徒たちは、島内外のさまざまな人とふれあう機会が多くなっている」と言う。

島内での交流に加え、研究発表会や中国語の大会などで島外・県外に出る機会もある。宮良さん、上原さん、東長田さんとも、都市部のいわゆる「キラキラした世界」を知り、少しはうらやま気持ちがありつつも、「石垣には必要ない」と断言する。「大人たちには、島の自然や文化をもっと大切にしてほしい。ゴルフ場や全国チェーンの飲食店はいらない。こんなにきれいな海や山があるのに、どうしてそういうものが入ってくるのだろうかと思う」と宮良さん。そして、3人が共通して望んでいるのが、「もっと島の人が活躍するまちになってほしい」ということだ。街なかの洒落た店舗は移住者が経営しているケースが少なくなく、「なんだかモヤモヤする」と言う。そんな彼女たちの言葉を、崎山先生は次のようにフォローする。

「自分たちの故郷が、知らないうちに変化させられているような感覚なのだと思います。自分たちの島だから、変えていく主体は島の人間で

ある自分たちでありたい。そんな意識の芽生えを感じます」

最後に、3人の生徒たちに、卒業後の夢や目標を聞いた。幼い頃から三線や伝統舞踊を習ってきたという宮良さんは、「三線を弾ける人も踊りを踊れる人も減っているの、芸能の道に進み、伝統芸能を継承していきたい」、中国語が好きだという上原さんは、「大学に進学して中国語を学び、語学を活かして石垣で観光の仕事がしたい」、語学が得意だという東長田さんは、「外国語大学に進学して英語と中国語を学び、空港のグランドスタッフとして働きたい。そして、いつか石垣に戻ってきたい」と、話してくれた。崎山先生は、そんな生徒たちに寄せる思いを込めて、次のように締め括った。

「私たち教師にできるのは、生徒に社会、世界への扉の入口を提示すること。扉を開いてその先にアクセスするのは生徒自身であり、郷土への思いを軸足にして、広く社会全体を捉えられるようになってほしいと考えています。そして、稼ぐ力だけでなく、八重山の豊かな自然や文化の価値に気づき、大好きな故郷を守りたいという純粋な気持ちを抱いてほしいと願っています。それが、本当の意味での生徒自身の幸せにもつながると信じています」

都城商業高校
(宮崎・県立)

学校
DATA

1904年創立／商業マネジメント科、情報ソリューション科／進路状況(2026年3月卒業) 大学46人、短大10人、専門学校55人、就職42人／Instagram「のくにラボ」(@nokuni_lab)「紙漉き文化再生プロジェクト」(@re_mknj_washi)

生徒の「やりたい」を起点に、 地域と関わりイノベーションを起こす



写真左から、商業マネジメント科3年の田中さくらさん、同・有菌瑛花さん、共創ウェルビーイング部顧問で国語科教諭の北郷晶子先生。

学校外に「出島」をつくり、 地域と新しい価値を共創する

肉と焼酎のまちとして知られる宮崎県都市にある都城商業高校。生徒たちが「やりたい」を起点に地域に飛び出し、地域の人と一緒に地域を盛り上げる活動をしているのが、「共創ウェルビーイング部」だ。「まちのゆるやかなつながりづくり」をコンセプトにした「のくにプロジェクト※」を立ち上げ、地域でワークショップやイベントを開催してきた。活動開始時の部員は4名だったが、4年目を迎える今年度は

30名を超えた。生徒たちの活動を見守ってきた北郷^{ほんごう}晶子先生は、「のくにプロジェクトの存在は、今や地域にとって大きなインパクトのあるものになっている」と言う。

発端は、閉店した校内の売店を復活させようと立ち上がった、有志の生徒らによるプロジェクトだった。かねてより、生徒がやりたいことを応援したい、生徒が地域と関わる取組を後押ししたいと考えていた北郷先生は、生徒が地域の事業者と連携し、共同開発した商品を販売するなど、「生徒たちがイキイキと活動する姿を見て、地域の人と関わる価値を再確認した」と振り返る。

地域の人と生徒と一緒に、新しい価値を生み出したい。みんなの「やってみたい」が掛け合わさったら、想像もつかない場所に辿り着けるんじゃないか。まずは、いろんな人の意見を聞いてみたい。そう考えた北郷先生は、地域の人々と生徒に呼びかけて対話のワークショップを開催。「10年後の都城に、こんなの、どう？」をテーマに語り合った。そこで自分がやりたいことを語ると、「学校の中だけでやるんじゃなくて、外に出しちゃえばいいじゃん」と言われ、ハッとしたという。「学校外に出島的な組織をつくり、そこで生徒

※「のくにプロジェクト」の「のくに」は、宮崎市内にあるアミューズメントパーク「こどものくに」に由来。「子どもだけでなく大人も含めてみんながつながり合えるまちづくり」の意を込めて、「こども」を取り「のくに」と名づけた。

が地域の人たちと新しい価値を生み出し、その価値を学校に取り込む…という流れをつくる」。そんな構想を描き、当時の福祉部を共創ウェルビーイング部と改称し、活動をスタートさせた。

地域の人々が集い、 つながれる場をつくりたい

1年目は、地域の子どもが店長を務めるパン屋さん企画、図書館での紙コップタワーづくりのワークショップなど、「生徒がやりたいことをどんどんやった」と北郷先生。「ゆるさ・ゆらぎ・ゆとりを大切に、年間計画は作らず、ゲスト部員も大歓迎。生徒が気軽に参加できる活動にしたかった」と言う。一方、自身は「ジェネレーター的な関わり方」に徹した。人と人をつなげたり、

生徒が一步踏みだすための仕掛けを考えたりと、「生徒と対等な立場で一緒に考え、活動している」と言い、そのスタンスは今も変わらない。

創部2年目に入部し、現在は部長を務める有蘭瑛花さん（3年生）は、「のくにプロジェクトは、地域とつながりながら、自分がやりたいことができる場」と笑顔を見せる。活動を広げるなか、有蘭さんをはじめメンバーたちは「せっかくイベントで出会ってもその場限りになってしまい、つながりがつukれない」という課題を感じるようになった。「ここに来れば誰かに会えるという場所をつくりたい」という思いからできたのが、「のくにラボ」だ。アイデアをかたちにする難しさに直面しつつ、場所探しから改修・内装まで地域の人々の協力を得て、昨年7月、薬局の跡地を



【左】地域の人と一緒に改装した「のくにラボ」。



【右上】地域の人同士が自由に物々交換ができる「みんなでよしなにしっくいんせ!」（宮崎の方言で「みんなでいい感じに交換してください」の意）を開催。

【右下】特別支援学校の生徒たちとコーヒーワークショップを共催。

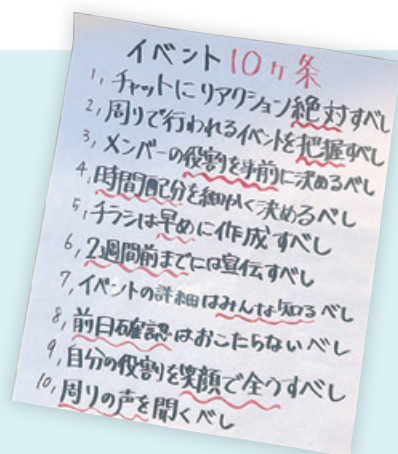
改装した拠点オープン。現在は、生徒主催のイベントや地域の事業者とコラボした企画などを定期的に開催している。

「実験できる場所、失敗しても大丈夫な場所という意味でラボと名づけた。自分たちが考えたことを実際に社会にぶつけてみるのが大事」と北郷先生。実際、「自信満々で地域の人にプレゼンしたらダメ出しをされたこともあるし、イベントにお客さんが全然来なかったこともある」と有蘭さん。失敗から学んだ教訓は「イベント10ヶ条」として共有し、経験を活かし合い改善を重ねている。

のくにプロジェクトを通して地域の人々とふれあい、その笑顔を見るなかで、有蘭さんは「地域の人たちも、集まれる場所が欲しかったのかもしれない」と気づいたと言う。有蘭さん自身は、幼い頃から近所の高齢者の方々にかわいがってもらい、餅つき大会やラジオ体操といった地域のイベントにも参加してきた。しかし、コロナ禍でこうしたイベントがほとんどなくなり、「つながりも希薄になってしまった」と感じている。実際、小学生の妹は地域との交流があまりないそう。「世代を超えて地域の人と人とがもっとつながれたらいいと思うし、将来は、そういう地域の場づくりに携わりたい」と語ってくれた。

消えつつある紙漉き文化を再生。 地域の眠った魅力を掘り起こす

出島的存在であるのくにプロジェクトに対し、そこで得られたつながりや知見を校内での実



践につなげたのが、3年次の課題研究のゼミの一つ「紙漉き文化再生プロジェクト」だ。かつて都城市で盛んだった紙漉き産業の再生を目指し、地域での紙漉きワークショップの開催や和紙を使った商品開発などに取り組んでいる。例えば昨年度は、地元の酒造メーカーと協力し、焼酎の蒸留過程で出る廃棄物を混ぜたリジェネラティブ和紙を開発した。2024年度に県より「循環型社会を実現する環境教育推進事業」の指定を受け、「地域の人との雑談のなかで紙漉きのことを知り、環境教育とかけ合わせたら面白いと思った」と北郷先生は経緯を振り返る。

紙漉き文化再生プロジェクトも、仕掛け人は北郷先生だが、主体になって進めるのは生徒たちだ。先輩たちの課題研究の発表や記録（研究日誌）、動画などから紙漉きの伝統や手法を学ぶことから始まる。田中さくらさん（3年生）は、「先輩たちの活動を受け継ぎたい、紙漉きをやりたい、地域の人とつながりたい」という思いから選択。仲間と試行錯誤しつつ紙漉きの技術を習得し、5月には第一弾として地域の高齢者に向けたワークショップを開催した。

プロジェクト活動を通して「消えつつある地



【左】今年5月に開催したワークショップでは、先輩たちから受け継いだ「紙漉き文化再生プロジェクト」の取組についても紹介。【右】楮（こうぞ）や水の量を調整し、記録をつけながら紙漉きに励む生徒たち。

域文化の再生に携わっているんだという誇りが生まれた」と話す田中さん。紙漉きのことを伝えたい、という思いでワークショップに臨んだ。一方、高齢者と話をするなかで、「昔は障子の張り替えのときに、剥がした和紙を溶かしてもう一度和紙に漉き直していた」と教わり、「紙漉き文化の知見がまた一つ増えた」と言う。

人前で話すのが苦手だったが、ワークショップやその準備をするなかで、「地域の大人や高齢者の方と話す機会が増え、自分にはない考え方や見方を知ることができた。人と話すことで視野が広がり、自分も成長できるんだと感じ、地域の人ともっと話してみたいと思うようになった」と自身の変化を語る。地元・宮崎が大好きだと言い、卒業後は宮崎大学地域資源創成学部で地域と経営について学び、将来は「宮崎の人がずっと住み続けたいと思えるまちをつくる仕事に就きたい」と話してくれた。

こうした取組により、同校は第14回キャリア

教育推進連携表彰で最優秀賞を受賞した。実際、卒業したのくにプロジェクトの初代メンバーは、ソーシャルイノベーターや地域の魅力を発信する編集者、地元の高校生と関わる仕事などに関心をもち、それぞれの道を歩んでいる。生徒たちを「共にイノベーションを起こす仲間」と称する北郷先生は、「生徒と同じフィールドに立って、同じ目線で考え、挑戦し続けたい」と言う。

「学校から地域に飛び出すことで、生徒には、いろんな人に出会い、いろんな職業や生き方に触れ、たくさんの選択肢があることを知ってほしいと思っています。そして、地域の眠った魅力を掘り起こす面白さを体感し、この地域にはもっと何かあるんじゃないかという期待感をもってくれたら…」と願っています。すでにあるものの価値に改めて目を向けることにこそ、地域における新しい価値創出の本質があると思うんです。これからも尊敬できる仲間たちと、地域でイノベーションを起こしていきたいと思っています」